書　　評

R. プレッサ著『人口』

Roland Pressat, *Population*, London, C.A. Watts & Co. Ltd., 1970, 152 pp+iii

1. 本書はフランス人口問題研究所人口推計部部長 Roland Pressat が仏文にてあらわしたものを，D. V. Glass 監修の下に Robert and Daniell Atkinson によって英訳されたものであり，The New Thinker's Library の一書として出版された新書版（152pp.）である．1年後の1971年には原文のフランス版が Démographie Sociale（168pp.）として P. U. F. から出版された．

2. 本書は人口学の手頃の入門書として，非常に手際よくまとめられている点に特徴がある．科学的分析や研究の対象としての人口を扱う人口学を，誰にでも納得いく形で，しかも読者の関心を引きつけるための苦心が払われている．人口学の二大源流としての Graunt と Malthus が第1章の課題となっていることは，このような著者の苦心の一端を示している．

3. 本書は9章から構成されており，人口研究の基本的な topic を魅力的な表現によってあらわしている．"世界人口はどのようにして増加してきたか"（第2章），"人口構造と社会構造"（第3章），"死亡の前の不平等"（第4章），"産児調節"（第5章），"差別出生力"（第6章），"近代家族"（第7章），"経済と人口"（第8章），"人口政策"（第9章）となっており，出生，死亡の人口現象のみならず，家族，経済といった社会学的，経済学的 topic を人口との関連で扱っている．本文はわずかに125頁であって，きわめて広汎な人口学の構成課題について歴史的発展をとりいれ，また基本的な統計や最新の事実にもとづいて展開されている叙述は誠に心にくいばかりである．専門家にとっても，人口教育上の有益な1つのモデルケースであるといえよう．

著者は，また問題の対象地域を主として経済的先進諸国に限定している．それは，"第三の世界"（The Third World, le Tiers Monde）とよばれる開発途上国の人口問題の重要性を認めなかったのではなくて，著者の言葉によれば"先進社会を考察することによって，この分析に（第三世界の…筆者注）より一般的な次元を与えたい"と思ったからである．いずれにしても，歴史的に研究されるある種の過去の事情は，部分的には，今日の開発途上国の事情に関連しているためである．しかし，著者はそれぞれの topic において可能な限り開発途上国に言及しており，その努力は敬服に値する．

人口学の入門的著作として注目されるのは，今日の課題としての，"産児調節論"（V Birth Control）が独立の章として加えられているばかりでなく，これに関連して"人口政策"が終章としてとりあげられていることである．重商主義の人口増加論から始まって西欧社会における出生力抑制政策の経験に及び，さらに今日の開発途上国における家族計画を中心とする人口増加緩和の政策論に及んでいる．この章でわれわれ日本の研究者に関心のあるのは，2頁半に及ぶ日本についての叙述（pp. 119-121）と最近において顕著な出生力低下を示すに至った台湾，香港，シンガポールについての見解（p. 123）である．

特に，台湾ならびに香港，シンガポールをふくむ中国系文化圏地域における出生力低下についての著者の見解である．この点については国際的にも議論の多いところであるが，著者は，責任のある出生と生れた子供は十分に養育したいという"先見"（foresight）の態度の一般化の存在を指摘している．国民に広くこのような態度がみられることが出生力低下の基本的要因であるとの見解である．

本書の構成において残念に思われるのは，人口移動の章が欠如していることである，それはともかくとして，高度に洗練された人口学への総合的接近への試みとして注目に値いする．　　（黒田　俊夫）